

列島保全への課題

戦後の国土造りは風水害との闘いで始まる

戦後の国土造りは戦災復興と食糧増産に加え相次いだ風水害との闘いで始まった。都市を回復して住まいを造り、生活できる環境を整えるのが急務だったが、そこに考えられない規模の強烈な風水害が繰り返し襲った。

敗戦直後1945（昭和20）年9月の「枕崎台風」。最低気圧916ヘクトパスカル、最大瞬間風速55・3級の強力な台風だった。秋雨前線の活動で雨が降り続いていた



利根川水系

わが国、国土への働きかけの歴史⑧

ところに台風の雨が重なり、死者・行方不明者3700人、家屋全半壊8万9000戸、浸水家屋27万4000戸、田畑被害12万畝。全国に極めて大きな被害をもたらした。

1948（昭和23）年9月には、「アイオン台風」が四国から東北を襲った。死者・行方不明者840人、家屋全半壊1万8000戸の大被害が出た。道路や堤防の決壊、橋梁の流出、鉄道の不通、船舶流出など被害が相次ぎ、特大洪水が襲い、利根川が破

台風で河川氾濫繰り返す

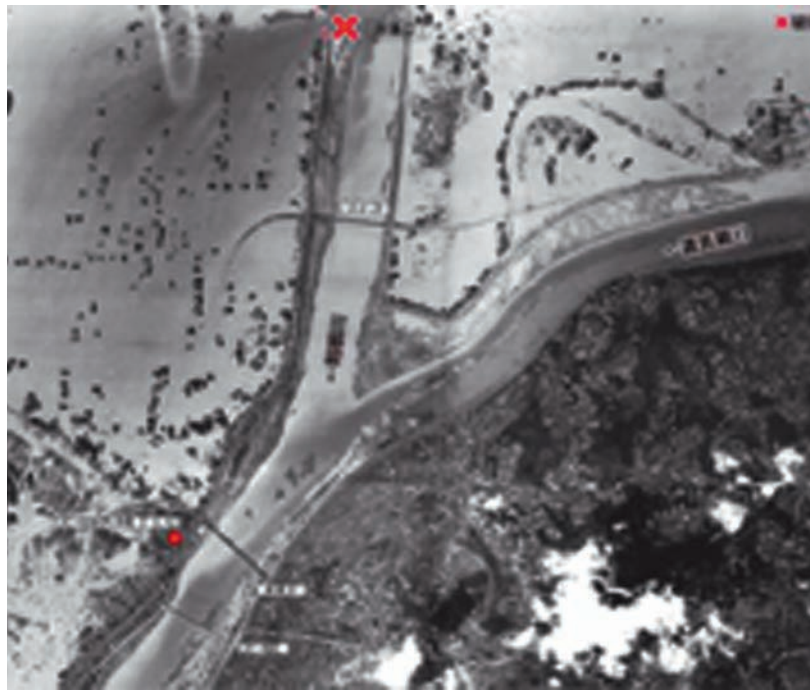
堤する大水害が発生した。死者・行方不明者1930人、家屋全半壊9300戸、浸水

下浸水31万戸。特に大阪市西部から兵庫県尼崎市にかけて甚大被害を被ったが、昭和初期からの地下水汲み上げによる地盤沈下が原因と分かり、沈下抑制のため地下水の使用制限が政策化された。

大災害の空白期に発展

戦後の社会資本整備は風水害頻発を受け、戦災復興とともに風水害による被害をいかに防ぐかを緊急の課題とした。当時は台風や洪水に対する備えも不十分だったのだ。

カスリーン台風による利根川堤防大決壊（ともに利根川上流河川事務所ホームページより）



もめるわが国の歴史の中で、一つの奇跡といえる。

碑の記憶⑥

大地震ごとく沖鳴りそら津波

大震嘯災記念

宮城県気仙沼市浪坂や同市三の浜（鶴ヶ浦）など数

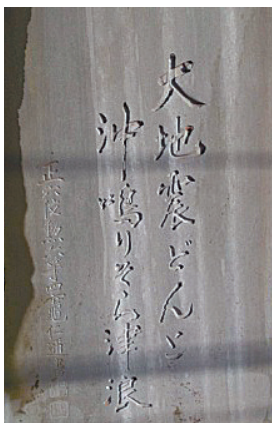
■碑文の裏

碑文の文語体を口語体にする以下になる。

宮城県気仙沼市浪坂や同市三の浜（鶴ヶ浦）など数カ所に、昭和三陸地震津波の予兆や教訓を刻んだ同じ碑文の「大震嘯災記念」石碑が建つ。

【大震嘯災概況】昭和八年三月三日午前二時三十分より二分間余にわたる大地震起こる。天より約十五分後、気仙郡沖合方面遙の海底に大小の爆音二回聞こゆ。後二十分にして大津浪来る。その被害区域本県より北海道に及ぶ。畏くも両陛下より御救恤金、更に皇后陛下より重傷者に衣服地、ここに裁縫料各宮殿下より御救恤金を御

■碑文の表||写真



下賜あらせらる。御仁慈恐懼感激に禁はず。救恤…困っている人に見舞いの金品を与え救うこと

国土と日本人



本書では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、何に基づくことの出る好著。発行：中央公論新社 定価：882円(本体840円)